



NHK ラジオ深夜便・放送内容 / 2015 年 11 月 16 日

私の"もしも"が現実になった日

私が代表をしている NPO ライフ・アンド・エンディングセンターは「高齢者の福祉はお元気な時からお墓まで」ということを目的として 2000 年に設立され、活動を始めました。2000 年 4 月は、ちょうど介護保険制度、成年後見制度が社会福祉の両輪として発足した年でした。

「私の自身の"もしも"が現実になった日」は、1995 年 4 月、2 度目の務めを終えた夫に食道がんが見つかったと知らされた日です。青天の霹靂でした。でも、どこかで予期していたようにも思いました。夫はタバコとお酒が大好きで友人たちとしばしば楽しく飲む機会を持っていましたし、飲みながら煙草をくゆらすという最も食道には良くないタイプのお酒でした。

食道がんの宣告を受けてから手術までの間に「がん」に関する本を探して夫婦で読み漁りました。けれども、どれも私たちが求めているものとは違うと思いました。もどかしい思いであちこちと探しました。当時は現在のようにがんに関する医師の方々の著書や闘病記もほとんどありませんでした。そのようななか、ある時、近くの図書館の書架上で「がん産業」という本に出会いました。「産業」という言葉に手に取るのを少しためらいましたが、借り出して帰りました。ラルフ・W・モス(科学ジャーナリスト、米国国立衛生研究所代替医療部門顧問当時)(蔵本喜久・桜井民子訳、学樹書院)によって 1995 年 3 月に書かれ出版されたばかりの本でした。上下 2 巻の分厚いこの本を読んで、それまでは医療は専門家の医師にお任せさえすればよいものと思っていましたが、それは違う。目から鱗のおもいをしました。もし自分が病気に罹ったら、医療や医薬品についても自ら調べることだと強く思わせるものがありました。「自分の命を守るのは自分自身」の感を強くしました。抗がん剤・放射線治療、様々な民間療法、あえて何もしない。最期に何を取るのかを決めるのは自分自身なのだと思わせました。自己決定、自己責任の重さを、大切さを知りました。

検査入院を経て病床の空きができたので入院しました。夫は日ごろとまったく変わらず元気にストレッチャーに載って手術室に向かいました。9 時間ばかり窓のない部屋で手術が終わるのを待ちました。日ごろ賑やかな娘たちも無言になり、新聞を読んでも雑誌を開いても落ち着きません。「手術は成功です」という医師の言葉にホッとしました。それから 21 日間個室で過ごした後、手術で胃袋を細い管状にして喉元で上部食道につなげられた新しい食道が、きちんと機能するかどうかのテストに「良し」という結果が出て一般病棟に移りました。ここで 1 週間ほど様子を見て退院が許されました。夫の体は手術と 21 日間点滴だけで過ごしたので、すっかり肉が落ち、立っているのが辛そうでした。退院時に担当の医師から「これから次第にお元気を取り戻されることと思いますが、場合によっては 3 ヶ月ということもあるかもしれません」という話を伺いました。術後には通院して放射線と抗がん剤の投与で治療を確実なものにしようというお話でしたが、夫はそれを拒みました。私もこれ以上体にダメージを与えたくない。治療のため病人のまま生涯を終えることになってはならない。たとえ 3 ヶ月であっても普通の暮らしができたなら後悔はないのではないかと思いました。抗がん剤も放射線もしませんでした。幸い 2 年後には夫婦で念願のイタリアへ旅をすることができました。夫は永遠の恋人ポッティチェツリのヴィーナスにも会えて上機嫌でした。

先の「がん産業」を読んだことで、何事も早めの準備が必要と考えていた私は「今回はこれまでと違って 3 ヶ月先に喪主として葬儀をすることになることもないとは言えない。必要なれば幸い」と思い、近隣の葬儀屋を 2・3 調べました。現在では葬儀屋さんでも見積書を出すのが当たり前になっていますが、当時は要領を得ない説明がされ、疑問を持ち、不安を感じました。

たまたまその頃、ある非営利団体が「葬送講座」を開くことを知り受講することになりました。葬送界で知らない人のない「SOGY」編集長の碑文谷創氏をはじめ弁護士、公証人などそうそうたる方々から「葬送」についての講義を受けました。葬儀の歴史や葬儀に係るいろいろなしきたりを学んだところ、古くから代々受け継がれてきた葬送と、それを営んだ人々に大いに興味を持ち、さらに知りたいという気持ちになり、いろいろと学ぶ機会をもちました。

大手術から 10 年、寒い 2 月の末 NPO 活動を積極的に手伝ってくれた夫は風邪から肺炎を起こし亡くなりました。夫の葬儀は、これまで NPO の仲間と開いた勉強会、模擬葬で皆様に伝えてきた「その人らしい身の丈に合った葬儀」を実際に行いました。

夕方 6 時から一夜葬「告別の儀」として無宗教で行いました。菩提寺からは登山を趣味としていた夫に峰を慈しんだことを意味する戒名をいただきました。華美な祭壇はなく櫛で山を模して緑の多い祭壇に彼岸桜の一枝が飾られ、山百合、深山キンボウゲに似た黄色い花などが飾られました。思い出のコーナーには山の装具などが飾られ、家族で旅をした時や山に登った時の写真が、大きく引き伸ばされて壁を飾りました。

祭壇には友人たちが持ち寄った花やたくさんの酒が備えられ、こもごもに思い出を語ってくれました。会食は各人グループごとに席につき、思い思いに談笑していただきました。狭い会場でしたので配膳の人たちが、席を回ってそれぞれに料理をサービスしました。通夜の席でたくさん残る料理が気になることがありますが、すべての料理を余さずあがって頂きました。会食は死者とともにする最後の宴でしょうか。賑やかなことが好きだった夫はきっと友人たちが賑やかに思い出話をしたり、棚卸をするのを喜んでいるのではないかと思いました。

がんの宣告を受けた後、夫は検体を申し入れていましたので、大学が差回した葬送業者が遺体を受け取りに来ました。柩を開いて最後のお別れをする段になった時、友人たちが祭壇から花を取り、声をかけながら柩がいっぱいになるほど入れてくれました。

家族が検体を認める書類に署名すると、出棺になりました。会葬者全員が会場から出て「行ってらっしゃい」と見送ってくれました。涙は出すまいと思っていましたが熱いものがこみ上げました。2004 年 3 月、あれから 11 年半余り経ちました。

葬儀には決まりごとはありません。決して忘れないこの日、心を込めて弔うことが逝く人にも残る者にも大切なのだと思います。